

機関番号：10101

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21792139

研究課題名 (和文) 口腔ケアが精神的ストレスの軽減に寄与するか

研究課題名 (英文) Dose oral care contribute to the decrease of the psychological stress?

研究代表者

阿部 貴恵 (ABE TAKAE)

北海道大学・北海道大学病院・医員

研究者番号：00455677

研究成果の概要 (和文)：

本研究では、統合失調症で入院中の高齢患者に口腔ケアを施行し、その口腔環境に及ぼす効果について検討した。口腔ケア介入により口腔衛生状態、口臭、口腔乾燥などの口腔環境の改善を認めた。また、介入 16 週後において精神症状 (陰性症状、総合精神病理) と生活障害 (持続性・安定性) の有意な改善を認めた。唾液ストレスマーカーについては、介入 16 週後にアミラーゼ活性値が有意に減少した。以上より、統合失調症患者への定期的かつ継続的な口腔ケアの介入は、口腔環境の改善のみならず精神症状や精神的ストレスを増強することなく口腔環境を改善することが示唆された。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of the present study was to determine: (1) whether there was a difference in the effects of professional oral care on psychopathological parameters, using global subscale of the Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS) and Life Assessment Scale for the Mental Illness (LASMI); (2) whether there was a difference in the effects of professional oral care on oral condition and salivary stress markers in elderly patients with schizophrenia.

There were significant improvement not only in the levels of oral condition but also in the scores of the PANSS (negative syndrome) and LASMI (durability and stability) in the subjects after intervention of professional oral care for 16 weeks. Furthermore, there was a significant decrease in the levels of salivary amylase after oral health care intervention.

This study suggests that receiving adequate professional oral care improved not only oral condition but also psychopathological status in elderly patients with schizophrenia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：歯学

科研費の分科・細目：社会系歯学

キーワード：口腔ケア,唾液中ストレスマーカー,統合失調症

1. 研究開始当初の背景

申請者は口腔ケアを用いて精神的ストレスの軽減に寄与するか検討し、口腔からの健康管理を世の中にアピールしていきたいと考えている。

精神疾患を有する者の多くは、自己管理の低下や抗精神病薬の副作用により、口腔内環境の劣悪性が指摘され、口腔衛生状態改善のための支援が必要とされている。精神疾患の中でも統合失調症は、全人口の約1%が罹患しており、発症すると経過が長期に及ぶため、**精神科領域では入院患者の退院促進や社会復帰が重要な課題となっている**。また、日本における精神保健福祉対策の流れとして、**新障害者プランに引き続き、障害者自立支援法が施行され、精神障害への対応が、入院治療からグループホームや在宅サ**近年口腔ケアは気道感染の予防、摂食・嚥下機能の向上、栄養改善等に有効であることが報告され、**口腔管理の重要性が医師、看護師をはじめとする他職種でも認識されている**。また、申請者らは大学病院病棟、各種施設等において口腔ケアを実践し、その過程で口腔ケアが歯周病・口臭などの口腔内疾患や誤嚥性肺炎を予防できるばかりでなく、**患者の表情や接している環境を通じて、口腔ケアが心のケアにもつながっている可能性を感じ、精神科病棟での口腔ケア介入研究を行ってきた**。

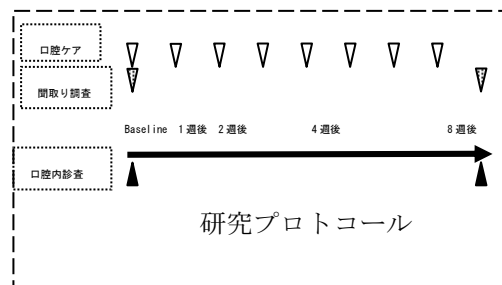
2. 研究の目的

日本は世界でまだどの国もかつて経験したことのない**超高齢社会**を迎えており、国民全体に対して**健康寿命の延長とQOL（生活の質）の向上が緊急の課題と位置づけられている**。健康で心豊かな生活を送るためには、生活習慣病の予防に加えて、心の問題にも大いに気

を配る必要がある。そのため、口腔ケアが若年者や精神的に健康である高齢者に対してどのような影響を及ぼすかをさらに研究を進め、検証していく必要がある。また、唾液成分によるストレスの評価は、まだまだ確立されたものではなく、現時点ではまだ研究開発途上であるが、唾液は非侵襲的に採取できる試料であるため、今後臨床の現場では有用なものと位置づけられる。そのため早急に、唾液によるストレスの評価方法を確立していく必要がある。

3. 研究の方法

精神科病棟に長期入院中の65歳以上の患者20名を対象とする。また当院外来通院している65歳以上の患者を健康な高齢者、当院学生を若年者とし、それぞれ約50名を目標に、口腔内調査、精神症状の調査（ベック抑うつ質問表による自己評価）、口腔ケア実施前後の唾液採取、唾液中ストレスマーカーの測定を実施する。これを統計解析する。結果、統合失調症患者、健康な高齢者、若年者における口腔内の状況、精神症状の状況、唾液中ストレスマーカーとの相関関係を明らかにする。



4. 研究成果

(1) 口腔環境に関して

統合失調症患者20名に対し、週1回16週間にわたる歯科医師による専門的口腔ケアを行った結果、口腔衛生状態、乾燥状態、および

口臭が有意に改善した。これは、要介護者に対して週1回の口腔ケア介入で口腔衛生状態の改善効果が得られた田村らの報告と一致している。今回の対象患者は全員が複数の抗精神病薬を服用しており、その副作用と思われる口腔乾燥を呈する者が多かった。そのため今回の介入では、器質的口腔ケアのみならず唾液腺マッサージなどの機能的口腔ケアも行い、その結果として口腔乾燥や唾液分泌量の改善につながったと思われた。眞木らの報告と同様に、精神障害者など知的あるいは心的側面に障害がある者への口腔ケアに関しては、看護・介護職への間接的支援だけでは改善効果は得づらく、障害者個別の口腔状態を把握した歯科医師による専門的口腔ケアが重要であると考えられた。

(2) 精神症状および生活障害に関して

一般的に精神症状の陽性症状は急性期、陰性症状は慢性期に多く認められる。本研究の対象者は、罹患期間が長い慢性期の患者であり、無為・自閉などの陰性症状を呈するものが多かった。本研究において、精神症状を陽性・陰性症状評価尺度 (PANSS) で評価した結果、口腔ケア介入により陰性尺度と総合精神病理尺度の有意な改善を認めた。

また、生活障害を精神障害者社会生活評価尺度 (LASMI) で評価した結果、口腔ケア介入により持続性・安定性の有意な改善を認めた。LASMI は生活障害あるいは社会生活能力を評価する尺度で、5つの下位尺度から構成されている。このうち日常生活、対人関係、労働または課題の遂行の3つの下位尺度は、社会生活能力の技能領域を評価し、持続性・安定性は経時的評価を、自己認識は心理的側面を評価するものである。今回の結果より、週1回16週間の専門的口腔ケア介入が、患者の生活リズムにおいて定期的な行動と位置づけられ、陰性症状や持続性・安定性に影響を与

えたことが示唆された。

一般に、統合失調症患者は、自己管理の低下や抗精神病薬による口腔乾燥のため口腔内環境が劣悪であるが、その不快感を自己表現することも困難である。このような状況で口腔ケアを導入すると、患者は口腔ケア施行者を不快感の理解をしてくれる存在として受け止め、心理的に治療効果をもたらす可能性がある。このような口腔ケアを通じたコミュニケーションが他者との信頼関係の構築や自信の回復につながり、精神症状や生活障害の改善をもたらした可能性が示唆された。統合失調症の陰性症状である感情の平板化、対人関係からの引きこもり、言語表現の貧困化といった状態は、刺激の少ない拘束的な病院環境に相関し、入院が長期化するとさらに症状が増悪する可能性が報告されている。口腔ケアが統合失調症患者の精神症状や生活障害を改善し、退院促進や社会復帰に少しでも貢献することが明らかになれば、その意義は極めて大きいと思われる。

(3) 唾液ストレスマーカーに関して

これまで唾液ストレスマーカーは心理ストレスの評価や歯肉浸潤麻酔の影響などに用いられた報告はあるが、口腔ケア介入前後に測定された報告はない。本研究では、統合失調症患者の精神的ストレスに及ぼす口腔ケアの影響を知るために、口腔ケア介入前後における各種唾液ストレスマーカーの変動を調べた。その結果、介入16週後に唾液アミラーゼ活性値のみが有意に減少した。唾液アミラーゼは交感神経支配を受けており、ストレスに対する反応が1～数分と早く、不快な精神的ストレスにより上昇することが明らかになっている。今回、口腔ケア介入後に唾液アミラーゼ活性値が低下したことから、口腔ケア介入が少なくとも精神的不快にならなかったと考えられた。また、ストレス時には唾液量が低

下しアミラーゼ活性値が増加するとの報告もあることから、本研究では機能的口腔ケアによる唾液量の増加がアミラーゼ活性値の減少に関与したことも考えられた。他のストレスマーカーに関しては、口腔ケア介入前後において有意な変動はみられなかった。これは、多くの唾液ストレスマーカーは短時間のストレスにはよく反応するものの、本研究で実施した口腔ケア介入のように、比較的長い期間をかけて徐々に口腔内が改善していくような変化には反応しにくいことが考えられた。

唾液成分によるストレスの評価は、まだまだ確立されたものではなく、現時点ではいまだ研究開発途上である。しかし、日本は世界でまだどの国もかつて経験したことのない超高齢社会を迎えており、国民全体に対して健康寿命の延長と QOL（生活の質）の向上が緊急の課題と位置づけられている。健康で心豊かな生活を送るためには、生活習慣病の予防に加えて、心の健康の問題にも大いに気を配る必要がある。そのため、唾液を利用したストレスの評価は、必ずや医療や介護現場で有用なものとして位置づけられ、実施されるようになると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①阿部 貴恵他：統合失調症を有する高齢患者における口腔ケアの介入効果. 老年歯科医学, 24 巻 337-343 項(2010) 査読有

[学会発表] (計 1 件)

①阿部 貴恵他：統合失調症患者における口腔ケア介入研究～第 3 報長期介入症例について～ 第 20 回日本老年歯科医学会大会, (2009 年 6 月 19 日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 貴恵 (ABE TAKAE)

北海道大学・北海道大学病院・医員

研究者番号：00455677

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし